

Special Essay

がんの治療に思う

緩和ケアセンター

福重 哲志

久留米大学病院はがんセンターである。たくさんのがん患者が入院し様々な治療を受けている。

多くの患者は院内で治癒と判定され、あるいは外来治療に切り替えられて元の生活環境に戻っていく。私はこの「元の生活環境」ということがとても気にかかる。発がんのメカニズムは21世紀を迎えた今も完全には解明されていない。さまざまな因子の組み合わせでがんは発生すると考えられる。患者の生活環境の中でその患者特有の発がん因子が明らかになる場合もあるに違いない。改善できるものは改善する必要がある。いくら病院の中で最先端のがんの治療を行っても、改善されていない「元の生活環境」に戻るのであればがんが再発してくるのは当たり前ではないだろうか？

がん患者の生活環境の中で食生活が発がんやがんの再発に影響を与えていることは間違いないと思われる。試しに昨日1日に食物内容を思い出してもらいたい。現代社会では食品添加物（あえて毒と言わせていただく）が使われていない食物を食べることは至難の業である。個々の毒の発がん性については検証されてはいるであろうが毒が組み合わせられた場合の発がん性については全く未知の世界である。収穫後の農薬使用などは言語道断であり殺虫剤が含まれた食物が健康に良いはずはない。ちなみに現代社会において食はがんの

みならず、いわゆる逆切れなどの精神症状を始めとした多くの問題に関係していると言われている。わたしは学生の国家試験の合格率にも食が関係しているのではないかと疑っている。

入院時から患者の生活環境を調査し、発がんに影響があると考えられるものは排除するように指導する。この取り組みがなされない限りがんの再発は繰り返されると思う。中でも食生活は指導すべき大きな対象となるのではないか。がんを相手にするためには丸ごとの患者の生活を対象とすることが必要なのではなかろうか。

がん患者の生活を総合的に診てがんを治療する。少なくとも院内の食事には毒は用いない。これが実践できれば久留米大学病院には全国から患者が殺到するであろう。言葉でいうことは簡単であるが実践するには多くの困難が伴うと思われる。しかしがん患者の生活を総合的に診るという方針はがんセンターとしての久留米大学病院が生き残る一つの道であると思う。

